

Vaiśeṣikasūtra 3-2-6~14 の推論説

野 沢 正 信

Vaiśeṣikasūtra 3-2-6~14 が Candrānanda (= C) によって、いかに解釈されているかを明らかにし、そこに現れる推論がどのようなものであるか検討したい。C のテキストによるこの部分の翻訳・研究は、すでに数種類ある¹⁾。しかし、次の点で問題はまだ解決されていない。

まずあげられるのは、3-2-6~8 が 2-1-15~17 と同一の議論になっているが、なぜ同じ議論が反復されるのかという問題である。この問題に答えるには、3-2-6~14 の解釈を確定しなければならないが、それにはこの部分の 2 つのキーワード、3-2-11, 13 に出る *pratyakṣa* と 3-2-11, 12 に出る *upacāra* の語義の解明が必要である。これまでの訳によれば、*pratyakṣa* は「現量」あるいは「直接知覚」とされ、*pramāṇa* としての *pratyakṣa* と解釈されてきた。また *upacāra* は「比喩説」「比喩的用法」「第二次的用法」「間接的表現」とされ、*bhākta* の同義語と解釈されてきた²⁾。しかし、これらの解釈では矛盾が生ずる。新しい解釈が必要とされている。

以下、1. *pratyakṣa* の語義、2. *upacāra* の語義、3. 3-2-6~14 の解釈、4. 3-2-6~14 と 2-1-15~19 の関係の順で論ずる。

1. *pratyakṣa* の語義

3-2-13 のテキストは、*aham iti pratyagātmani bhāvāt paratrābhāvād arthāntarapratyakṣaḥ* / である。この *pratyakṣa* が「知覚」であるならば、*arthāntara* = *ātman* なので、ここに「*ātman* の知覚」が説かれることになる。

Upaskāra (= U) では、そのように解釈されている。しかし、*ātman* の知覚が、*Nyāya-Vaiśeṣika* 学派において認められたのは、*Uddyotakara* あるいは *Bhāvivikta* 以後とされる³⁾。U の解釈は、この後代の説にもとづいている。

C は 3-2-6 を次のように注釈する。

目と対象の接触がある場合、「これがヤジュニャダッタである」という知覚が生ずるようには、「この呼気などあるいは快感などと結合しているものはアートマンである」という知覚は生じない。とすれば、目に見えないものと結合している呼気などが、どうしてアートマンの徴表といえるのか。(C p. 29. 11)

これは反対論者の主張であるが、Vaiśeṣika 説を受けての批判とみなされるので、ここに「ātman の知覚」は否定されている。9-13には「ātman の知覚」が説かれるが、これは通常の知覚ではなく、ヨーガ行者の知覚とされる⁴⁾。C 注において ātman の mānasapratyakṣa は、これ以外に説かれない。また、4-1-6 では、知覚される実体は、大きさをもち、多実体からなり、色をもつものであるとされる。ātman は、この条件に合わない。C は「ātman の知覚」を認めていない。とすれば、3-2-13の pratyakṣa を「知覚」とすると矛盾が起こる。

C は、これを「知覚」と解釈していない。3-2-13 注に次の文が出る。

それ故、アートマンすなわち“他のもの”について、「わたし」という語は pratyakṣa である。(C p. 30. 21)

ここで pratyakṣa は中性形ではなく男性形で用いられており、perception を意味する名詞ではありえない。形容詞であるが、主語が ahaṃśabda なので、perceptible の意味ではありえない。では、どのように解釈されているのか。

3-2-10以下は、ahaṃśabda が śarīrapratyakṣa であるか、arthāntarapratyakṣa であるかをめぐる論争である。この争点に対応する語句が注釈文に見いだされる。śarīrapratyakṣa に対しては、ś°-abhidhāyaka (30. 4, 16), ś°-vācaka (30. 5, 31, 3), ś°-vacana (30. 9, 20), また arthāntarapratyakṣa に対しては ātma-vācaka (30. 4), ā°-abhidhāyaka (30. 15), ā°-vṛtti (31. 4) という語が見いだされる。すなわち pratyakṣa は、vācaka, abhidhāyaka, vacana, vṛtti という語に対応させられている。これらは「直接表示する」「表す」「意味する」「～の意味で用いられている」という意味をもつ。いずれも vācaka の同義語である。以上から、C は pratyakṣa=vācaka 「直接表示する」と解釈していたと結論しうる。

2. upacāra の語義

C の3-2-11のテキストは次のようになっている。

devadatto gacchati viṣṇumitro gacchatīti copacārāc charīrapratyakṣaḥ/

この upacāra が bhākta 「比喩的用法」と同義語ならば、Nyāyakandali (= NK) の次の説と等しくなる。

身体がアートマンに奉仕するから、「わたし」という語は第二義的に身体の意味で用いられることがある。(NK (VSS) p. 86. 5).

これはNKの結論であり、Vaiśeṣika 説である。Uは上のスートラを Vaiśeṣika 説とするので、その upacāra=bhākta という解釈は矛盾を起こさない⁵⁾。しかし、Cはこのスートラを反対論者の主張とする⁶⁾。C のテキストにおいて upacāra=

bhākta ならば、NK 説が反対論者の説と一致するという矛盾が起こる。

C は upacāra = bhākta と解釈していない。3-2-12の注で次のように述べる。

「デーヴァダッタ」という語と同一の基体にあることにもとづく、「身体」の意味での「わたし」という語の upacāra は疑わしい。はたして、身体がアートマンに奉仕するから、本来アートマンを表す「わたし」という語が転用されるのか、あるいは、第一義的に「身体」を表すのかという疑いが生ずるので、「わたし」という語が身体とアートマンのどちらを意味するか決定されない。(C p. 30. 14f).

「身体」の意味での「わたし」という語の upacāra が第一義的に「身体」を表すのかという疑いが生ずるといえるとき、upacāra は bhākta ではありえない。

Nyāyasūtra (= NS) は upacāra を二つの意味で用いる。NS 1-2-11, 14 には upacāracchala という語が出るが、この upacāra は、Nyāyabhāṣya (= NBh) によれば、「x ではないものを x であるかのように表すこと」である⁷⁾。

一方、NS 2-2-61, 62 (= 59, 60 CalSS) に現れる upacāra を NBh は prayoga と解釈する (ChSS p. 419. 6)。C も 3-2-11, 12 において upacāra = prayoga としている。3-2-11注の prayogāt という語は、スートラの upacārāt のいいかえであろう。

進行を表す「行く」という語とともに用いられるから (prayogāt), デーヴァダッタという語は「身体」を意味することが確認される。(C p. 30. 9)

以上から、C は upacāra を bhākta ではなく prayoga と解釈していたと結論できる。

3. 3-2-6~14の解釈

上の結論にしたがって、3-2-6~14を訳せば、以下のようになる。6~8は ātman の推論は成り立たないという反対論者の批判、9は ātman を表示する ahaṃśabda と同一基体にあることから、呼吸などが ātman の推論の徴表たりうるとする解答、10, 11は ahaṃśabda が表示するのは ātman ではなく、身体であるという反論、12~14は ahaṃśabda が ātman を表示するという答論、という構成になっている。(以下、O=反対論者、V=Vaiśeṣika)

6. O: 接触がある場合でも、「ヤジュニャダッタである」という知覚のように、(アートマンの知覚は) 生じないから、(アートマンには) 目に見える徴表はない。

7. また、(呼吸などのような、何らかの原因を有することという) 共通性にもとづいて認められる徴表によっては、(虚空などが排除されないからアートマンを) 特定できない。

8. したがって、(アートマンが存在するというのは) 伝承にもとづくことでしかない。
9. V : 「わたしは呼吸をもつ」という表現に見られるように、呼吸などと同一の基体を有する)「わたし」という語が(アートマンを表すので、それ以外の実体を)排除するから、(呼吸などはアートマンの徴表たりうる。アートマンは)伝承にもとづくものではない。
10. O : もし「わたしはデーヴァダッタである」「わたしはヤジュニャダッタである」という目に見えるものの知覚が(アートマンに関するものであれば、「わたし」という語はアートマンを直接表示することになる。)
11. (しかし)「デーヴァダッタが行く」とか「ヴィシュヌミトラが行く」という用法があるから、「デーヴァダッタ」と同一の基体に属する「わたし」という語は)身体を直接表示する。
12. V : そうではない。(「身体」の意味での「わたし」という語の)用法は(第一義的なものであるかどうか)疑わしい。
13. 「わたし」という(語)は個我に存し、他のもの(すなわち身体)には存しないから、他の対象(すなわちアートマン)を直接表示する。
14. また、ヤジュニャダッタやヴィシュヌミトラと身体が異なるから、(かれらの「わたし」という語を用いる根拠となる自我意識についての)特殊な知は(われわれには)生じない。(「わたし」という語が、もし「身体」を意味するならば、かれらにも適用されるであろう。しかし、そのようなことはない。したがって、「わたし」という語は「アートマン」を意味する。故に、呼吸などはアートマンの徴表たりうる。)

4. 2-1-15~19と3-2-6~14の関係

2-1-15~19(以下A)と3-2-6~14(以下B)の初めの三ストートラは、同じ趣旨をもつ。それぞれ風と ātman について推論が成立しないという反対論者の批判であるが、この議論の核をなしているのは、知覚不能なものの推論 sāmānyatodṛṣṭa(=sd)の有効性の問題である。知覚できない実体の存在論証をsdに依存する Vaiśeṣika にとって、これは極めて重要な問題であった。同じ議論が反復されることに、この問題に対する関心の深さが示されている。

ではAとBの関係はどのようなものか。Aでは風を例にとって実体の存在論証としてのsdの有効性に関する一般的な解答が与えられるのに対し、Bでは ātman を話題とする特殊な場合での解答が与えられている。

Aでは、「この感触は、地などの感触とは異質であるから、また何も依り所とし

ないことはありえないから、風がその依り所である」という sd が問題にされ、次の議論がなされる。(C p. 13, 14f)

O: 虚空なども知覚できないから、それらを否定することによって、この感触が風にのみ属するという特定がなされなければならないが、この sd によっては、それが理解されない。

V: 遍在するものが感触を有することは否定されるから (特定が可能である)。

O: その感触が一般に認められたものに属するものであって、十番目の実体に属するものではないことは、どうして知られるのか。

V: 理解力などでわれわれより優る、幸ある大主宰神による命名が、実体は九だけであることの徴表である。十番目は名称が示されていないから、実体は九だけである。それ故、この感触は風にのみ属する。

ここには、sd が pariśeṣa を補助とし、また pariśeṣa は āgama による対象範囲の限定を前提として成立することが述べられる。ところで、C はここに大主宰神をもちだし、2-1-19をその存在論証とするが、ディグナーガの伝える解釈によれば、これは āgama は知覚にもとづくものであるから正しく、またそのため āgama は推論に含められることを主張するスートラである⁸⁾。

一方、Bでは、「呼気などが原因をもたないことはない。また快感などが何ものにも依存しないことはない。それ故、それらには何らかの原因あるいは依り所があるはずである。(したがってアートマンが推知される)」という sd が問題にされ、次のような議論がなされる。(C p. 29, 15f)

O: 虚空なども、それらの原因たりうるから排除されず、アートマンを特定することはできない。

V: 「わたしは呼気をもつ」「わたしは快感をもつ」というように、(呼気、快感などは) 地など (八実体) とは区別されるアートマンという実体を対象とする「わたし」という語と同一の基本を有するから、アートマンの徴表たりうる。

この議論の特徴は、ātman を直接表示する ahaṃśabda によって他の実体が排除される点にある。Aでは、「地などの感触とは異質であるから、地・水・火の感触ではない。遍在するものは感触をもたないから、虚空・時間・方角・アートマンには属さない。したがって、この感触は風に属する」という pariśeṣa によって風と感触の関係が確立される。Bでは、ahaṃśabda との共通基体性によって、呼気などの徴表と ātman の関係が立証されている。また、Aでは āgama が前提として必要とされるのに対し、Bでは āgama にまったく依存していない点

も注目される。これらの相違が、同じ反論をあえて反復させた理由であろう。

結び

このCの3-2-6~14の解釈は他に例を見ない。Cにのみ見られるものである⁹⁾。しかし、注釈書の支持はないが、おそらく *Prāśastapāda* も同じ解釈をしていたものと思われる。すなわち, *tathāhaṃśabdenāpi pṛthivyādiśabdavyatirekād* (*VizSS* 70.9) は、注釈書によれば、独立した *ātman* の存在論証とされる。しかし、*Faddegon* が示唆するように、この文は *sukhaduḥkheccḥādveṣaprayatnaiś ca guṇair guṇy anumīyate* (70.6) に対する理由の一つであろう¹⁰⁾。

しかし、この解釈は、その注釈書に見られるように、*ātman* が *ahaṃśabda* によって、呼気などを介さず直接に推論されるという説¹¹⁾、あるいは知覚されるという説¹²⁾が現れるに至って支持を失っていたものと思われる。

- 1) 金倉圓照『インドの自然哲学』(平楽寺書店 1971年), p.67, 村上真完「ヴァイシュエーシカ哲学におけるアートマン存在の論証」(『東北大学文学部研究年報』第25号 1975年), p.37, 中村元「ヴァイシュエーシカ学派の原典」(『三康文化研究所年報』第10,11号 1977-8年) p.58, 安達俊英「ヴァイシュエーシカ・スートラにおけるアートマン」(『待兼山論叢』第19号 哲学編 1985年) p.11.
- 2) 金倉 p.67, 村上 p.41, 中村 p.61, 安達 p.12.
- 3) *The Encyclopedia of Indian philosophy*, vol.II Nyāya-Vaiśeṣika, Delhi 1977, p.96.
- 4) 「ヨーガ行者の知覚は、(われわれに)知覚できるものとできないものを対象とするから、知覚と推論の中間で解説される」C p.68.12.
- 5) UはU3-2-12に次の文を前置する。「反対論者が、もし「わたしはヤジュニャダッタである」という観念がアートマンに関するものであるならば、(アートマンには運動が不可能であるから)「ヤジュニャダッタが行く」という、進行と同一基体を有するものの観念は起こりえないことになろうというので述べている」
- 6) 本稿 p.492.
- 7) *atadbhāve tadvadabhāvam upacāraḥ NBh* (ChSS) p.197.6. この解釈は NS 2-2-64(=62 CalSS) *tadabhāve 'pi tadupacāraḥ* という文句と関連している。
- 8) 詳しくは、拙稿『ヴァイシュエーシカ・スートラ』第2-1章の推論説(『藤田宏達博士還暦記念論文集』所収予定)参照。
- 9) ただし, *aham* という語による他実体の排除にもとづいて *sd* が成立するという解釈は U にも伝えられている。U (KSS 195) p.248. 6f.
- 10) *Faddegon, The Vaiśeṣika System*, Amsterdam 1918, p.258.
- 11) NK p.85.20「アートマンは、快感などによって推論されるように、「わたし」という語によっても推論される」
- 12) *Kiraṇāvali* (GSS) p.93.2「他者のアートマンが推論されるように、「わたし」という観念によって、(自己の)アートマンは知覚の対象とされる。

<キーワード> *ahaṃśabda ātman sāmānyatodṛṣṭa pratyakṣa upacāra*

(沼津工業高専助教授)